

書 評

河村民部著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝
——詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』
(英宝社、2015)

松村 伸一



セオドア・ワッツ＝ダントンの名に当節聞き覚えがある者といえおそらくは、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティかアルジャノン・スウィンバーンに関心を寄せる人くらいではないだろうか——それも、マイナーな文人でもあった介助者として、記憶にとどめていることだろう。ロセッティの晩年を通してワッツ＝ダントンは、法務実務(「テューダー・ハウス」の賃貸契約更新やパトロンとの厄介な交渉など)を委ねられるとともに、文学上の助言も求められた忠実な友人であり、その最期をロセッティの肉親とともに看取った数少ない友人の一人だった。また1879年には、著しく健康を害していたスウィンバーンをロンドン郊外のパットニーに用意したパインズ邸に引き取って同居し、健康回復へと導いた。その一方で、これら著名詩人との親しい関係がワッツ＝ダントン自身の文名を高からしめたとは、必ずしも言いがたい。彼は長年ロセッティと親交を結んだにもかかわらず、その回顧録を書かなかった(「親しすぎる者は書かない方がよい」という助言に従い、代わりにそう助言したジョゼフ・ナイトが筆を執った)。またエドマンド・ゴスの『スウィンバーン伝』(1917)には、ワッツ＝ダントンの庇護下におかれて以降、スウィンバーンの生活と文筆から生彩が失われたかのような、いささか責任転嫁めいた暗示が随所に見受けられる。

もちろん、曲がりなりにもワッツ＝ダントンの名を知る者の中には、その代表作である小説 *Aylwin* (1898) を読み、その奇妙な魅力に接したことのある読者もいるかもしれない(戸川秋骨による邦訳が1925年に刊行されている)。あるいは同時代人たちの思い出を記した *Old Familiar Faces* (1916)

や唯一の詩論集 *Poetry and the Renascence of Wonder* (1916)、さらには同じタイトルの詩劇を主とする詩集 *The Coming of Love* (1898) を拾い読みしたことくらいあったかもしれない(私自身もその域を出ない)。しかし、そうした読者の中に、今はほぼ忘れられたこの文人独自の文学的な価値と意義を信じ、その復権に務めようとした者がいたかと言うと、皆無であったと言わざるを得ない——本書の著者より以前には。

復権という言葉の含意として、まずかつてはその評価が高かったということ、そしてその忘れられた価値を再び思い起こす意味があるということ、このふたつが前提条件となるはずである。河村民部はこの文字通り重厚な一巻を通して、ワッツ＝ダントンの条件をふたつとも満たしているのだと伝えようとしている。その試みがどこまで成功しているのかについては、以下本書の内容に沿ってセオドア・ワッツ＝ダントンの生涯と業績をたどることで、検討してみたい。

Theodore Watts (1832-1914) は、Huntingdonshire (現 Cambridgeshire) の主要市街地のひとつ St. Ives に事務弁護士の息子として生まれた(1897年に母方の姓 Dunton を加えたのは遺産相続の都合らしい)。父が地質学者 Charles Lyell と親交を結んだ科学者でもあった一方、叔父からは文学と神秘主義への関心を受け継いだ。10歳の時から7年間、ケンブリッジの私立学校 Academy for Young Gentlemen で学んだ後、実家に戻って父のもとで法律事務に携わるようになった。そのかわり、父の蔵書を貪るように読み、地方紙に意見記事を投稿したり、ひそかに詩や散文を書いたりした。とりわけ、同じく「東 部 地 方」^{イースタン・カントリース}出身の作家で、ロマニー(いわゆるジプシー)の生活に取材した小説群で知られる George Borrow (1803-1881) には早くから魅了され、直接の面識もあった。セオドアはその後も長く、ロマ文化への造詣の深さで知られることとなる。

仕事の都合でロンドンを頻繁に訪れるようになった1870～72年頃に転機が訪れる。まずロンドン下層民を描いて人気を博した小説 *Owen: A Waif* (1862) の作者 Frederick William Robinson (1830-1901) と、偶然の出会いから意気投合して文壇とのつながりができた。折しもロンドンで弁護士として成功を収めていた弟が急逝したのを期に、ロンドンに移り住むことになる。元医師で美術にも造詣の深い詩人 Charles Gordon Hake (1809-95) の

知遇を得たのもこの頃であった。Hakeの神秘主義的傾向を持つ作品にはロセッティが早くから注目していた関係で、この人を介してセオドアはロセッティ・サークルの一員となる。1872年9月に偽造小切手でロセッティの銀行口座から金が引き出される事件があり、これを裁判沙汰にしないで処理する手助けをしたのが直接のきっかけだったようである。また、当時すでにAylwinの執筆にも取りかかっていた。

Great James Streetに引っ越して隣人となったスウィンバーンとは特に個人的なつきあいが深くなった。さらに一年後に移ったDanes Innではやはりそこで隣人となったWilliam Minto (1845-93)に誘われて、Mintoが1874～78年に編集長を務めた*The Examiner*に評論を寄稿するようになる。同じ頃に自宅で開いた水曜夜会にはリチャード・バートンやジョゼフ・ナイトなど新たな友人も集った一方、劇作家John Westland Marston (1819-1890)の主宰する日曜夜会やMrs. Louise Chandler Moulton (1835-1908)の「金曜日の団欒」にも足繁く通うなど、急速に文化人の間に社交を広げていく。1874年7月にロセッティがケルムスコットからチェルシーに戻るとセオドアも同居し、「肉感派」との非難を受けて心身とも衰弱しきった詩人画家の生活を身近で支えた。ロセッティの助手Henry Treffry Dunnによる、この二人のよく知られた肖像画(1882年作、National Portrait Gallery所蔵)はそうした日々を想起して描かれたものだろう。1876年には影響力のある高級誌*The Atheneum*に社員として迎えられ、以後、そこに書評を寄稿することがセオドアの主な仕事となり、それが彼の文人としての地位を確固たるものとした(「殆ど毎週6～8コラムのエッセイを一つ書いていた」)。

セオドアは書評その他の依頼原稿を書き続けるかたわら、自作の詩と小説を書き継いだ。そして冒頭に述べたとおり、ロセッティとスウィンバーンという二人の友人の支えでありつづけた。1905年11月末、73歳のセオドアは19年にわたる婚約の末に40歳年下のClara Jane Reichと結婚した。ヘイク編『セオドア・ワッツ＝ダントンの伝記と書簡』にはクララによる回想録が収められており、河村によるその詳しい内容紹介はセオドア晩年の私生活を彷彿とさせる。しかし、1909年にスウィンバーンが没して以降、大きな目標を失ったセオドアは1914年6月、仕事の合間の午睡のさなかに死去したという。

順序が前後するが、本書は三部構成で、その第一部が上に要約した評伝である。『愛の到来』や『エイルウィン』の内容紹介のほか、妻による回想録や友人による印象記も含まれる。「人柄」に末尾の一節を割いているのがヴィクトリア朝風である。第二部は「詩論・評論・書評概説」として、第三部に転載された原文テキストの要約を載せている。

さかのぼれば、本誌第7号で中島俊郎が書評した『詩から小説へ——ワーズワスとロマン派の末裔』（2008年10月）のあと、2014年には4月に『ワーズワス^{リリカル・バラッド}『抒情民謡集』再読』を、10月に『エロスとアガペ：^{シンボリック}饗宴の比較文学——ヴィーナス・タンホイザー伝説から川端康成まで』を立て続けに刊行していた（いずれも英宝社）。2012年に近畿大学を定年退職した後の精力的な研究活動がうかがえる。『エロスとアガペ』において河村はすでにD・G・ロセッティとワッツ＝ダントンの関係に一章を割いていた。その一章について、著者は同書の「はじめに」で、松村昌家編『日本とヴィクトリア朝英国——交流のかたち』（大阪教育図書、2012。本誌第11号で村岡健次が書評）に収められた山口恵里子の「英国ヴィクトリア朝の日本趣味と明治芸術のラファエル前派受容——中世主義と装飾芸術を結び目として」と、飛ヶ谷美穂子「ロンドンの異邦人たち——漱石・カーライル・シャープ」（『比較文学』第55巻、2012）に触れ、それらを読んだことが執筆のきっかけになったと述べている。さらに「ないと思っていたロセッティとワッツ＝ダントンとの交友関係についての詳細な論文」が1993年にすでに山口恵里子によって発表されていたことを本人から聞き及んで吃驚したことも告白している。そしてあえて（と言って良いだろう）「補遺」として、山口の当該論文「ロセッティの裸体画にみる“Nature”——ウォッツ＝ダントンとの関係を踏まえて」（*The Round Table*, Vol. 8, 1993）の論旨を、コメントを交えつつ、紹介している。なお、*The Round Table*は慶應義塾大学の高宮利行研究室で刊行が始まり、今も継続中の院生・学部生による論文集で、山口や飛ヶ谷を含め、現在第一線で活躍中の研究者たちが若き日に書いた論文が収められているが、その性質上、慶應義塾大学図書館以外でこれを閲覧することはほぼ不可能なので、河村が^{あえて}自著で「紹介」しているのも、故なきことではない。

話を本書に戻すと、河村は「総序」と「結語」で繰り返し、前著で「仕残

したこと」すなわち「ワッツ＝ダントンの伝記的事実や、彼の評論家としての具体的論文を十分に渉猟する」ことを果たしたかったのだと、執筆動機を述べている。結果としてわれわれはいわば「ワッツ＝ダントン大全」とも呼ぶべき一書を手にすることとなった。およそセオドア・ワッツ＝ダントンについて知るべき事実と資料は、網羅しているものと思われる。反面、内容紹介に終始し、作品テキストへの批評的分析的アプローチに欠けるくらいは否めない。ただ、本書を以前の河村の業績と照らし合わせると、明瞭な批評の一貫性は見えてくる。すなわち、神秘の源としての自然というテーマである。山と海というロマン主義的トポスに関する比較文学研究から始まった河村の遠い旅は、海と山とジプシーの神秘に魅せられた一人の埋もれた文人の再発見で（ひとまず）区切りをつけたように見える。

他人事のように語っている場合ではない。そういえば、山口恵里子の「ロセッティの裸体画……」も、実は彼女自身が前年に発表した論文に谷田博幸から誤りの指摘を受けたことが論文執筆のきっかけだったと、その謝辞で述べられていた。このように新旧世代の間で純粋な学知の交流が生まれていた／いることに、改めて胸を打たれる。若き研究者が掘り起こしたワッツ＝ダントンへの関心を、年長者が引き継いで、丁寧に堅固な基礎固めを果たした。この再発見された詩人批評家をヴィクトリア朝文化や詩学の歴史の中に位置づけるという作業の〈バトン〉は、河村から下の世代へとふたたび返されたのである。

——青山学院女子短期大学教授